

山陽放送社長賞

お婆さんの靴

岡山市立足守小学校

六年生 藤原 彩

私は、土曜日の午後、友達のエウカと自転車で、近水園の池の鯉にエサをやりに行きました。この公園は、足守町並み保存地区の北側にあり、吟風閣やカエドと桜が有名です。私の通学している小学校も近くにありますが。季節ごとに変わる風景を楽しみに、年間を通じて多くの観光客が訪れます。五月には、カエドも桜も青葉でいっぱいです。その日も、カップルや家族づれ、団体客の人が景色を見ながら、私たちの側をゆっくりと通り過ぎていきます。私は、このゆっくりとした時間が大好きです。そして、この後、エウカと何をして遊ぶかと考え始めたとき、

「お嬢ちゃんたち、この近くに靴屋さんはないかなあ。」

と、後ろから声がありました。振り返ると、八十歳ぐらいのきちんとした服装のお婆さんが立っていました。

「靴の底がとれて困っとんよ。」

お婆さんは、自分の靴を指さして言いました。見ると、右足の靴をヒモでしばっていました。お婆さんが靴先を少し上げると、靴は、口を開けたみたいに上下に開いて、お婆さんの足の先が見えました。

私は、服と靴を売っているお店を思い出して、

「ここから五百メートルぐらいの所にあります」

と言うと、

「そんなに遠いならいいわ。バスの時間もあるし。このままで行くわ。ありがとう。」

と、ニッコリわらって言うのと、侍屋敷の方へゆっくり歩きだしました。

私たちが自転車で買ってくれば、バスの出発までには間に合うかと思って、エウカを見ると、エウカも私を見てうなづきました。

お店にはすぐ着きました。靴棚には、二千円から五千円ぐらいの靴が並んでいました。

私たちが今持っているお金は、二人合わせても三千円ぐらいしかありませんでした。靴を買おうと思ったら、サイズも聞いていませんでした。お婆さんは私と同じくらいの背の高さで、茶色の靴をはいていたので、私たちのお金で買える、二十四センチサイズの茶色の靴を買いました。

いそいでお婆さんを捜しました。河川敷でお婆さんに追いつきました。靴を脱いで靴下だけで歩いていました。

「これよかったらはいってください。」

二人で、袋に入った靴を渡しました。サイズは合うかな、気に入ってくれるかなどドキドキしました。お婆さんは、何度も、「ありがとう。」

と言いながら靴をはきました。サイズもピッタリでした。まわりの人たちにも、

「ありがとう。」

と言われました。私たちが帰ろうとすると、

「靴代はいくら。」

と聞かれたので、

「いりません。」

と言ったけど、何度も言われたので、レシートを見せました。

すると靴代と千円を私たちに渡して、

「電話をしたいから番号を教えて。」

と言われました。私は、知らない人に付いて行ったり個人情報をおしえたりしないようにと、家の人にいつも言われていたが、お婆さんだし悪い人ではなさそうなので、家の番号を伝えて、お婆さんを見送りました。もらったお金は、ユウカと相談して二人で分けました。

次の日の夕方、お婆さんから電話がありました。お婆さんは、自分のことを高知県に住む八十歳で、定年まで学校の先生をしていて、昨日、今日と詩吟の大会が岡山県であったので、あき時間に、足守の歴史観光に寄ったと紹介しました。そのあとで、「詩吟大会では、三位になったんよ。あなたたちの気持ちのおかげよ。この靴は、私の宝物、ありがとう。」と、うれしそうに言って、

「小学校にもこのことを伝えたいけど、いい。」

と聞かれたので、

「はい。」

とこたえました。

月曜日に、学校で教頭先生から、

「高知県のお婆さんから電話があったよ。」
と言われました。

私は、「お婆さんの靴」の事があってから、人と人との出
会いや、つながりは不思議だなと思いました。ユウカが一緒
にいなければ、靴を買いに行こうとは思わなかったかもしれ
ないし、近水園に行つてなければ、高知県のお婆さんにも会
わなかったと思います。

また、あのお婆さんや他の観光客の人が岡山县や足守に観
光に来てくれるとうれしいです。